



NANMEI KENBUNROKU

南溟見聞録

Vol.

002

式
号

日本とインドネシアを、資源・物流・建設でつなぐ。

月 1 回程度配信 / PDF 版

Greetings

皆様へ

こんにちは。PT. Japan Bridge Asia 代表の播磨谷洋一です。
本 PDF ファイルは、これまでに的名刺を交換させていただいた方、また業務でご縁のあった皆さまへ、私の判断でお送りしております。

日本とインドネシアの間で、資源・物流・建設を軸に事業の橋渡しをしております。「南溟」とは、荘子が描いた大鵬が目指す南の大海のこと。日本から南洋の島々を望み、現地の生きた情報と、その奥にある大きな流れをお届けできればと、この見聞録を始めました。

前号で少しだけ触れた「人口ボーナス」という言葉。インドネシアの底力を語るとき、必ず登場するキーワードですが、その中身を数字できちんと見たことのある方は、意外と少ないのではないのでしょうか。今号は、この「人口ボーナス」を一段深く掘り下げます。

播磨谷 洋一

YOICHI HARIMAYA

CONTENTS

目次

01 そもそもインドネシアの人口ボーナスとは？

02 具体的な男女年齢比率は？

03 日本と比較した場合の現在と未来

04 故に、若いエネルギーに満ち溢れたインドネシア

本号のテーマ

人口ボーナスで読み解く、
インドネシアの若さという
資産。

其
の
一

CHAPTER 01

そもそもインドネシアの
人口ボーナスとは？

人口ボーナスとは、「働く人が、支えられる人より圧倒的に多い」時期のことです。

子どもと高齢者（扶養される側）に対して、生産年齢人口（15～64歳＝働く側）の割合が大きく膨らむ期間を指します。働き手が多く、扶養負担が軽いため、貯蓄・投資・消費のすべてが伸びやすい。日本の高度経済成長も、中国の躍進も、この「ボーナス期」に起きました。

インドネシアはいま、まさにその只中にいます。2025年時点で人口は約2億8,400万人（世界第4位）。うち生産年齢人口は約1億9,600万人、全体の69%を占めます。従属人口指数（働き手100人が支える子ども・高齢者の数）は45。つまり働き手約2人で扶養1人を支えればよい、非常に身軽な人口構造です。

2.84 億人 総人口（世界第4位）	69 % 生産年齢人口の割合	45 従属人口指数（働き手100人あたり）
-----------------------	-------------------	--------------------------

しかし、この「好機の窓」は永遠に開いているわけではありません。統計局の見通しでは、ボーナス期は2030年代半ばにピークを迎え、2040年代にかけて徐々に閉じていきます。だからこそ「黄金のインドネシア2045」（独立100周年）までに先進国入りを、という国家目標に、これほどの熱がこもっているのです。

働き手約2人で扶養1人を支えればよい、
非常に身軽な人口構造です。

其
の
二

CHAPTER 02

具体的な男女年齢比率は？

数字で見ると、この国の「若さ」が立体的に見えてきます（2025 年、BPS 統計局の推計）。

男女比 男性 1 億 4,355 万人（50.5%）、女性 1 億 4,089 万人（49.5%）。女性 100 人に対し男性約 101 人という均衡した構成です。

年齢構成 0～14歳が 6,672 万人（23.5%）、15～64歳が 1 億 9,613 万人（69.0%）、65歳以上は 2,158 万人（わずか 7.6%）。

中央値年齢 約 31 歳。国民のちょうど真ん中が、31 歳の働き盛りです。

人口ピラミッドは、若年層が厚い、きれいな末広がり。毎年約 440 万人の赤ちゃんが生まれ（世界第 6 位）、合計特殊出生率は 2.1 と、人口を維持できる水準をなお保っています。Z 世代とミレニアル世代だけで人口の半分近くを占めており、デジタルネイティブが多数派の国——それがいまのインドネシアです。

デジタルネイティブが多数派の国。
それがいまのインドネシアです。

其
の
三

CHAPTER 03

日本と比較した場合の
現在と未来

日本と並べると、その差は劇的です。

2025年	インドネシア	日本
総人口	約2億8,400万人	約1億2,400万人
中央値年齢	約31歳	約50歳
65歳以上の割合	7.6%	29.4%（世界最高）
生産年齢人口の割合	69.0%	約60%
人口の方向	増加中（2050年代まで）	減少中（毎年減少）

国民の真ん中の年齢が、31歳と50歳。ほぼ一世代分の開きです。日本は高齢化率29.4%と世界で最も高く、働き手2人で高齢者1人を支える段階に入りました。2070年には高齢化率39%へ、支え手は1.3人にまで減ると推計されています。

一方のインドネシアは、人口が2050年代まで増え続け、ピーク時には3億2,000万人を超える見通しです。もっとも、インドネシアにも同じ未来はいずれ来ます。出生率は緩やかに低下しており、ボーナス期が閉じたあとに豊かになりきれない「未富先老（富む前に老いる）」は、この国が最も恐れるシナリオです。日本の経験（成功のプロセスも、高齢化への備えの遅れという課題も含めて）ほど、彼らにとって参考になる相手はいないとも言えます。

其
の
四

CHAPTER 04

故に、若いエネルギーに
満ち溢れたインドネシア

数字の先にあるのは、街の熱気です。

平日の朝、ジャカルタのカフェは商談する20代・30代で埋まり、夜の屋台には仕事帰りの若者があふれる。スマホ一つで商売を始め、配車も決済も送金もアプリで完結させる。中央値年齢31歳の国では、社会の「標準」が若いのです。新しいサービスへの適応が速く、消費に勢いがあり、失敗を恐れない起業の空気がある。

前号で述べたAI・エネルギー・資源という「土台」に、この1億9,600万人の若い働き手という「エンジン」が載る。これがインドネシアという国の構造です。ただし人口ボーナスは、自動的に成長へ変わるわけではありません。教育、雇用の質、そして投資——こうした「若さを生かす仕組み」があって初めて「ボーナス」になります。逆に言えば、そこにこそ日本の企業や技術が貢献できる余地が大きく開いています。

縮む日本と、膨らむインドネシア。

互いの持ち物を交換できる好機と捉える。

日本には技術・資本・高齢化を先に経験した知恵があり、インドネシアには市場・資源・そして何より若さがある。弊社 Japan Bridge Asia は、この二つを結ぶ橋でありたいと考えています。

縮む日本と、膨らむインドネシア。これを悲観と楽観で語るのではなく、互いの持ち物を交換できる好機と捉える。

日本には技術・資本・高齢化を先に経験した知恵があり、インドネシアには市場・資源・そして何より若さがある。弊社 Japan Bridge Asia は、この二つを結ぶ橋でありたいと考えています。

次号も、南溟の風に乗せてお届けします。



播磨谷 洋一 YOICHI HARIMAYA

PT. JAPAN BRIDGE ASIA 代表

インドネシアに拠点を置き、現地に腰を据えて資源・物流・建設を軸とした事業を手がける。M&A アドバイザリー、日本企業の市場参入支援も。インドネシアに深く根を張り、現地の生きた人脈と現場感覚をもって、日本とインドネシアを確かにつなぐ。

PT. JAPAN BRIDGE ASIA

日本とインドネシアを、資源・物流・建設でつなぐ。



WEB japanbridge.asia

MAIL info@japanbridge.asia

HEAD Wisma Keiai Lt.2, Jl. Jend. Sudirman No.Kav. 3,
Jakarta Pusat, DKI Jakarta 10250, Indonesia